平成27年度
学校改善支援プラン

～「H26全国学力・学習状況調査の結果分析」と「学力向上の方策」～

Ⅰ 「５つのエッセンス」の検証
児童生徒質問紙・学校質問紙の結果から

Ⅱ 校内研修体制の充実とその課題
校内研修体制と言語活動の充実の現状及びその課題

Ⅲ 今後注視したい本県の課題
家庭学習とゲーム・携帯電話等の関連

Ⅳ 各教科の成果と課題
TOPICS（福井県との比較）

Ⅴ 秋田の探究型授業の一層の推進
国語、算数・数学の授業改善のポイント

Ⅵ 特色ある校内研修の取組例
教師の指導力・授業力を高める共通実践例

Ⅶ 検証改善委員による提言

●学力向上に関する資料

美の国あきたネット（http://www.pref.akita.lg.jp/）＞子育て・教育＞学校教育＞小・中学校

・学校改善支援プラン　・秋田県学習状況調査　・全国学力・学習状況調査保護者向けパンフレット　等

秋田県検証改善委員会

Ⅰ 「一人一人の学力を伸ばすあきたの

本県の検証改善委員会では、全国学力・学習状況調査の結果を基に、「一人
平成26年度の調査結果と、直近の悉皆調査である平成21・

※自校と書いてある欄に、自校の数値やグラフを

1 学校体制でＰＤＣＡサイクルの確立

本県で、学力向上において成果を上げている学校は、教育目標の共通理解、全国調査等の結果の活用、県学習状況調査と全国調査を関連付けた指導などの取組が顕著です。

教育目標・方策等の共通理解

学校質問紙の経年比較		H21	H25	H26
調査結果を学校全体で活用	小学校	100.0	96.7	95.9
	中学校	100.0	96.9	99.5
教育指導の改善・指導計画への反映	小学校	100.0	99.2	95.8
	中学校	100.0	97.6	100.0

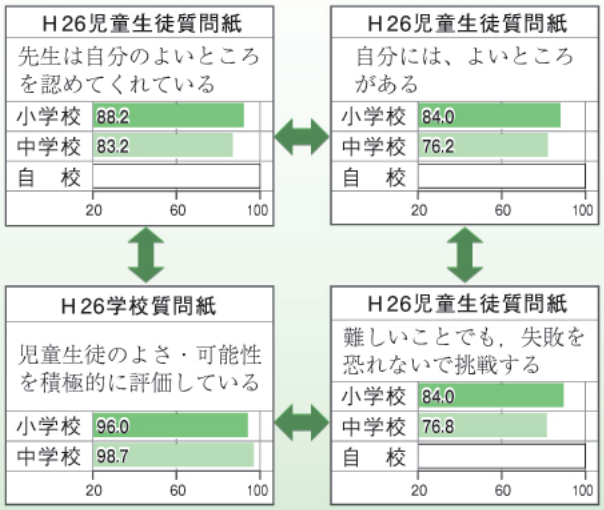
※H21・25・26年度では調査内容の文言に違いがありますが、
同じ質問項目として数値を比較しています。

全国学力・学習状況調査の結果の活用

学校質問紙の経年比較		H21	H25	H26
学校教育目標の達成に向けた方策等の共通理解	小学校	100.0	100.0	100.0
	中学校	99.7	99.6	99.6

2 子どもたちが．安心して学習できる環境づくり

子どもたちのよさを積極的に評価する教師の姿勢が、児童生徒の自己有用感を高め、失敗を恐れず、いろいろなことに挑戦しようとする意欲の醸成へとつながっています。



各教科の平均正答率

小学校6年生平均正答率　※（　　）内は全国比

教　科	H21	H21自校	H25	H25自校	H26	H26自校
国語A	75.3 (+5.4)	(　　)	71.7 (+9.0)	(　　)	77.4 (+4.5)	(　　)
国語B	60.4 (+9.9)	(　　)	59.1 (+9.7)	(　　)	67.3 (+11.0)	(　　)
算数A	86.2 (+7.5)	(　　)	82.8 (+5.6)	(　　)	85.1 (+7.0)	(　　)
算数B	63.7 (+8.9)	(　　)	67.1 (+8.7)	(　　)	66.2 (+8.0)	(　　)

平成26年度は、全ての教科で全国平均正答率
る問題（A問題）よりも活用に関する問題（B

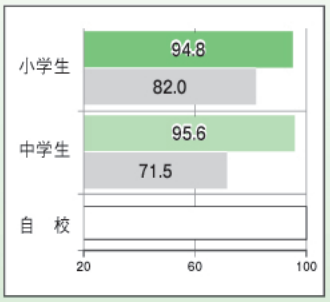
3 子どもたちの思考を

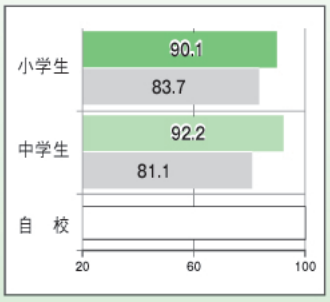
本県では、学習の目的をもって、学習課題についてたりして課題を解決する「探究型」の授業が行われて習課題の提示や振り返りの活動を取り入れることによ授業スタイルが本県の特徴であり、学力を支える大き

めあて・ねらい　　発表・話

授業のはじめに授業の目標（めあて・ねらい）が示されている。

授業では、自分の考えを発表する機会が与えられている。





※数値はH26児童生徒質問紙の肯定的な回答の割合

※ｐ１，２の横棒グラフの数値は児童生徒質問紙・学校質問紙の肯定的な回

学校～５つのエッセンス～」の検証

一人の学力を伸ばすあきたの学校～５つのエッセンス～」を作成しています。
25年度の調査結果を併せて、その変化や特徴を探りました。

記入して授業改善等にご活用ください。

（平成21・25・26年）

中学校3年生平均正答率　※（　　）内は全国比

教　科	H21	H21自校	H25	H25自校	H26	H26自校
国語A	82.3 (+5.3)	(　　)	81.9 (+5.5)	(　　)	84.4 (+5.0)	(　　)
国語B	81.8 (+7.3)	(　　)	74.6 (+7.2)	(　　)	55.8 (+4.8)	(　　)
数学A	68.8 (+6.1)	(　　)	68.9 (+5.2)	(　　)	73.0 (+5.6)	(　　)
数学B	63.4 (+6.5)	(　　)	47.5 (+6.0)	(　　)	65.5 (+5.7)	(　　)

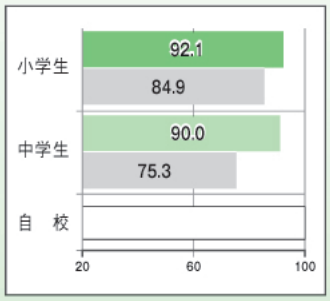
を４ポイント以上上回っています。知識に関す問題）で全国を大きく上回る傾向にあります。

促し深める授業づくり

グループで話し合ったり、学級全体で意見交換をします。授業の見通しをもたせるためのめあて・学り、今日の授業で何が身に付いたのかが実感できるな要因となっています。

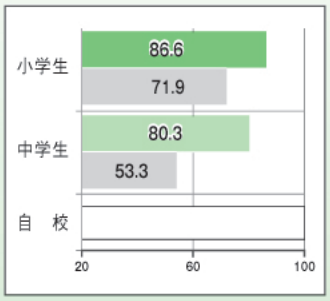
合い

授業では、友達との間で話し合う活動をよく行っている。



まとめ・振り返り

授業では、最後に学習内容を振り返る活動を行っている。



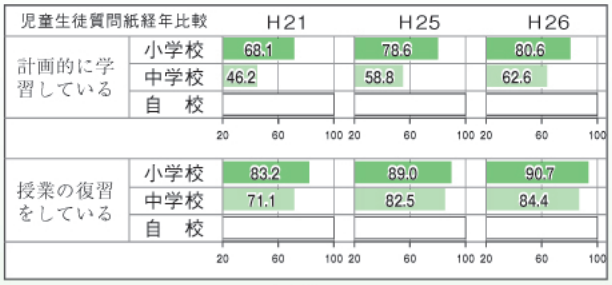
（%）秋田小　全国中　全国小・中

答の割合（%）を表しています。

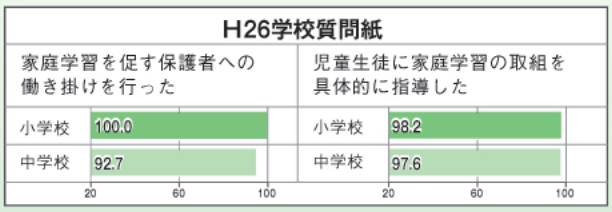
4　自発的学習を生み出す きめ細かな指導

秋田の学力は、授業と家庭学習のコラボレートによって相乗的に高められたものです。家庭学習を促す保護者への働き掛けや、計画的な学習に向けた具体的な指導も充実しています。

児童生徒の家庭学習の状況

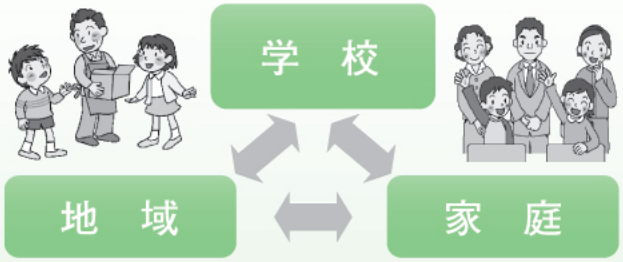


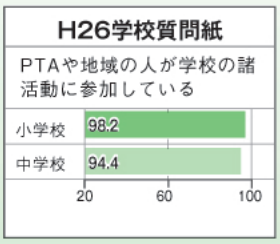
家庭学習推進のための取組

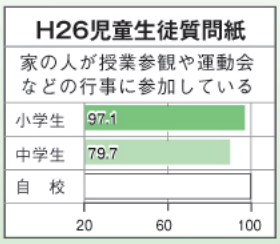


5　豊かな教育力を育む 学校・家庭・地域の強い連携

基本的な生活習慣や家庭での学習習慣の定着は、学校や地域との連携があってこそです。家庭・地域・学校の強い連携が、秋田の学力の源です。







Ⅱ　校内研修体制の充実とその課題

各校において、学力向上の具体的な取組を実のあるものにするためには、校内研修体制の充実が不可欠です。ここでは、本県の各校における校内研修体制と「言語活動」に関する質問紙の結果から本県の現状と課題について取り上げています。

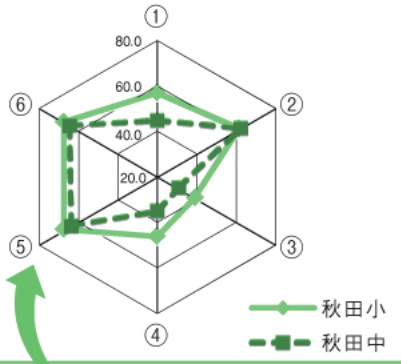
1　本県の各校における校内研修体制の現状

学校質問紙の校内研修に関する調査結果は、全国に比べると良好な結果であると言えます。しかし、小・中学校間で比較すると、中学校では、ほとんどの項目が小学校を下回り、「研修や研究会の成果の反映」や「学習指導・評価等の計画作成における連携」など小学校と10ポイント近く差が開いている項目も見られます。

校内研修に関する主な質問項目		小学校	中学校
①	模擬授業・事例研究会の実施	56.4	44.4
②	他校や外部機関への積極的な研修	61.4	62.1
③	研修や研究会の成果の反映	39.1	30.6
④	学習指導・評価等の計画作成における連携	46.8	35.5
⑤	教育目標や方策等の全教職員による共通理解	67.3	63.7
⑥	学力傾向や課題についての共通理解	67.3	64.5

※表の数値は、「よくしている」と回答した学校の割合(%)

校内研修に関する質問項目の
レーダーチャート



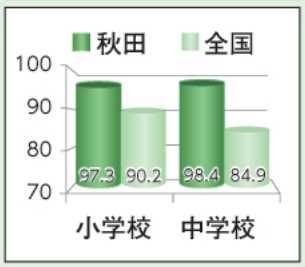
注目　○全国学力・学習状況調査において成果を上げている中学校では、⑤の**「教育目標や方策等の全教職員による共通理解」の数値が高い傾向があります。「教育目標や方策等の全教職員による共通理解」は、中学校における学力向上のポイントの一つ**と考えられます。

2　言語活動に関する各校の取組

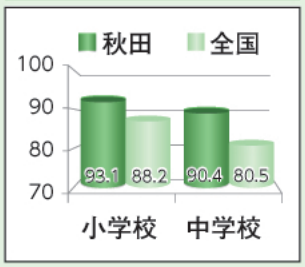
成果　校内の共通実践項目として、言語活動の充実に関する取組が、全国に比べ進んでいることが分かります。

※グラフの数値は、「よく行った・どちらかといえば、行った」と肯定的な回答をした割合（%）

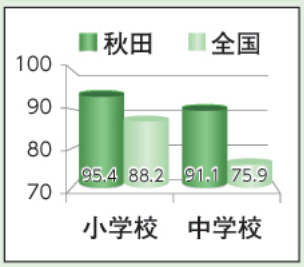
各教科のねらいを明確にした言語活動の位置付け



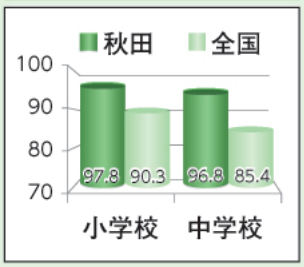
言語活動に重点を置いた指導計画の作成



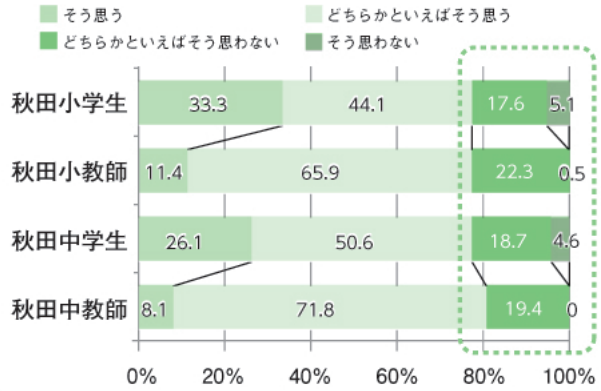
学校全体の言語活動の実施状況や課題についての共通理解



学校全体としての言語活動の取組



課題　言語活動に関する取組は進んで来ていますが、探究型の授業を推進する上で核となる「話合い活動」にまだ課題が見られます。



児童生徒質問紙と学校質問紙の共通質問内容

「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。」
（児童生徒質問紙№48、学校質問紙№20）

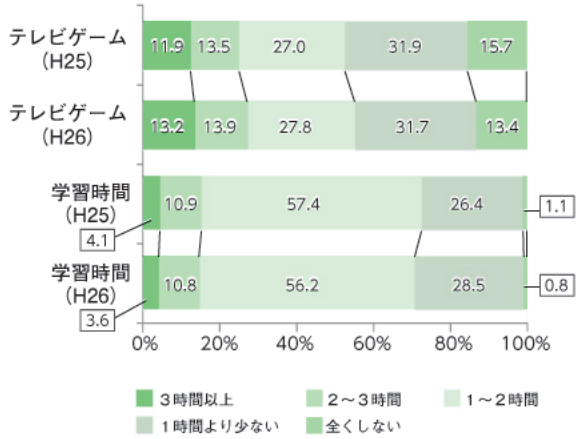
「どちらかといえばそう思わない、そう思わない」と回答している割合は、教師、児童生徒ともに**約２割**です。思考を深めたり、広げたりする話合い活動の在り方について、各校において研究を進め、共通実践することが必要です。

Ⅲ　今後注視したい本県の課題

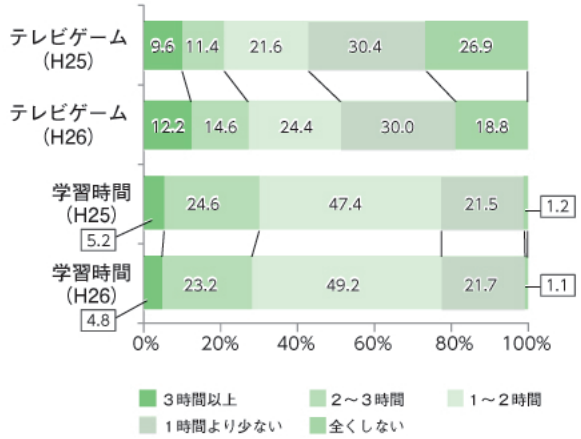
ここでは、「児童生徒が１日当たり、家庭学習、テレビゲーム、携帯電話やスマートフォンを使った通話やメールにどれくらい時間を充てているのか」、「悩みを誰に相談しているのか」という質問項目の調査結果から明らかになったことを取り上げて、テレビゲーム、携帯電話やスマートフォンが児童生徒の学習や生活に及ぼす影響等について考察しました。

１　家庭学習の時間とテレビゲームの使用時間

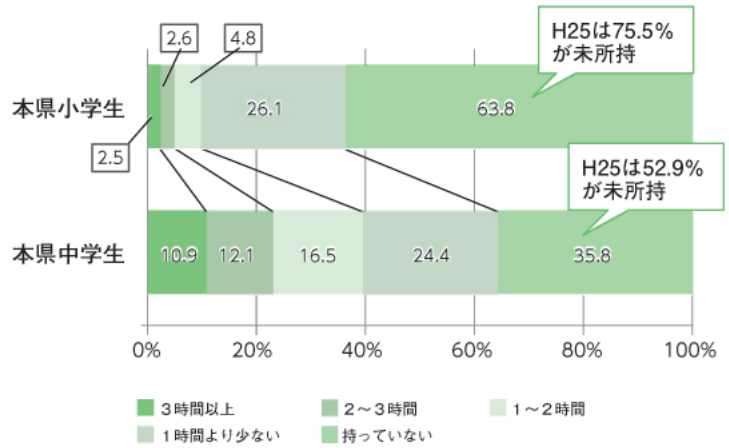
本県小学生



本県中学生



携帯電話の使用時間



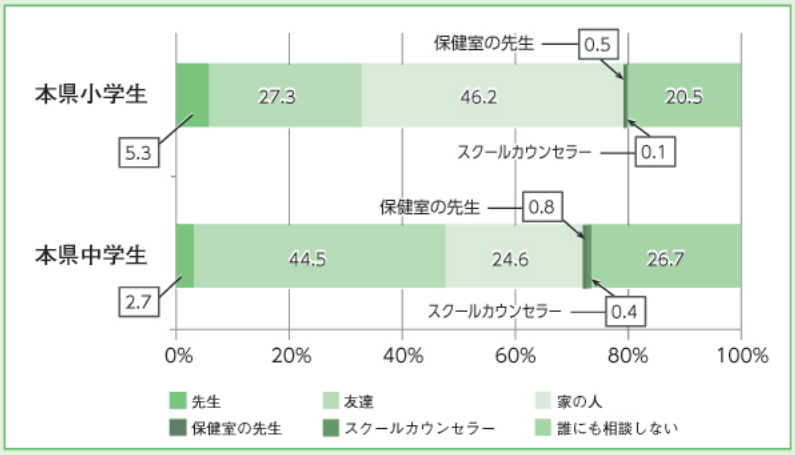
テレビゲームの使用時間については、**中学生では１日平均２時間以上行っていると回答した生徒が、５人に１人の割合から４人に１人の割合に増加**しています。**全くしないと回答した生徒は８％減少**しています。

携帯電話についても**中学生では**約４割が１時間以上使用し、**全体の２割が２時間以上使用**しています。所持率も、**小学生では約３人に１人が、中学生では約３人に２人が所持**しており、１年間で大幅に増加しています。

２　児童生徒の相談の形態

H26児童生徒質問紙

学校生活で友達関係など何か悩みを抱えたら、誰に相談することが多いですか。



悩みについて相談する対象は、そのほとんどが友達か家の人ですが、**「誰にも相談しない」と回答している割合が小学生では５人に１人、中学生では４人に１人**です。これらの数値を念頭に置きながら、児童生徒の学校生活の状況を見届けていくことが重要です。

Ⅳ 各教科の成果と課題

国　語

＜成果＞

平均正答率は、全ての教科で全国平均を４ポイント以上、小学校のＢ問題では10ポイント以上上回っている。

・小Ｂ３三「二つの詩を比べて読み，自分の考えを書く」（全国比+22.8）
・中Ｂ１三「文章の構成や表現の仕方などについて，根拠を明確にして自分の考えを書く」（全国比+11.8）

＜課題＞

●小学校では、「故事成語の使い方」【Ａ２一、二】、「分かったことや疑問に思ったことを整理し、それらを関係付けながらまとめて書く」【Ｂ２二】などに課題がある。
●中学校では､「資料から適切な情報を得て、伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く」【Ｂ２三】に課題がある。
●小・中学校に共通して、
①文章や資料から必要な情報を取り出すことはできているが、それらを用いて適切に説明したり、要旨をまとめたりすることに課題がある。
②故事成語やことわざの使い方の理解については依然として課題が見られる。

算数・数学

＜成果＞

平均正答率では、全ての教科で全国平均を５ポイント以上上回っている。算数では、数量関係の領域において、数学では、関数の領域において改善が図られている。

・小Ｂ３（3）「示された情報を整理し、筋道立てて考え、小数倍の長さの求め方を記述する」（全国比+15.1）
・中Ｂ３（2）「事象を理想化・単純化して問題解決した結果を解釈し、数量の関係を数学的に説明する」（全国比+8.9）

＜課題＞

小学校では、「作図に用いられている図形の約束や性質を理解する」【Ａ６】や「示された情報を基に、条件に合う時間を求める」【B3(1)】、「必要な量と残りの量の大小を判断し、その理由を記述する」【Ｂ3(3)】に課題がある。

中学校では、「底面が合同で高さが等しい円柱と円錐の体積の理解」【Ａ5(4)】、「付加された条件の下で、証明を振り返って考え、事柄を用いる」【Ｂ4(2)】、「不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を説明する」【Ｂ5(2)】に課題がある。

TOPICS

中学校において本県の平均正答率を上回っている福井県との比較を通して見えてきた、本県の教科の解答状況について取り上げました。

【中学校国語Ｂ】「領域や問題形式」でみる本県中学生の状況

本県の平均正答率は、全ての領域で福井県を上回るものの、問題形式の「選択」で下回っていることが分かります。６問の選択問題のうち５問で下回っています。

平均正答率	領域			問題形式	
	書く	読む	言語	選択	記述
福井県	47.6	54.1	62.5	60.1	47.6
本　県	48.8	54.2	63.0	59.4	48.8

正答を選択するためには、叙述から根拠を見いだすことがポイントになります。正答を示した上でその理由を話し合わせるなど、指導を工夫していくことが必要です。

【中学校数学】解答類型でみる本県生徒の思考力の状況

数学のＡ問題では、「数と式」「関数」､Ｂ問題では「図形」と、差がある領域に違いが見られました。Ａ問題では、知識・理解及び技能の確実な定着に課題があると考えられます。

	Ａ問題の領域ごとの正答率					Ｂ問題の領域ごとの正答率				
	平均正答率	数と式	図形	関数	資料の活用	平均正答率	数と式	図形	関数	資料の活用
福井県	74.3	84.5	71.8	66.7	67.0	66.9	65.2	65.1	71.6	62.2
本　県	73.0	81.8	71.3	63.7	70.5	65.5	64.2	62.3	71.0	61.4

Ｂ問題の「図形」では、生徒の解答の状況に違いが見られました。下の表はＢ問題４(1)の解答類型の比較ですが、類型２の数値が大きく違っています。

類　型	1	2
本　県	19.6	25.5
福井県	14.7	33.6

（正答の条件）　次の(a)、(b)、(c)、(d)とそれぞれの根拠を記述し､証明しているもの。
(a)AB＝AC、BD＝CE　(b)∠ABD＝∠ACE　(c)△ABD≡△ACE　(d)AD＝AE

類型１	◎	(a)、(b)、(c)、(d)とそれぞれの根拠を示しているもの。
類型２	○	(a)、(b)、(c)、(d) の表現が十分でなかったり、記号を書き忘れたりしているが、証明の筋道が正しいと分かるもの。(a)、(b)、(c)、(d)の根拠が抜けていたり、根拠の表現が十分でなかったりするものを含む。

授業においては、類型２のように、根拠の取り上げ方が不十分なものについても、まずはそこまでの考え方を認めながら、より正しい解答に迫るために必要な根拠を考えさせるような手立てを取り、徐々に証明の精度を高めていくよう指導を工夫していくことが必要です。

Ⅴ　秋田の探究型授業の一層の推進（国語、算数・数学の授業改善のポイント）

探究型の授業の推進を図るために、国語科においては単元構想の在り方について、算数・数学においては１単位時間内での工夫のポイントを示しました。

小学校国語　第２学年　並行読書を位置付けた探究的な学習の展開（教材：『お手紙』ほか）

〈授業改善の方策〉

並行読書を取り入れた「読むこと」の単元において、子どもたちの多様で個性的な解釈を交流させ、それぞれの解釈を深める探究的な学習活動を位置付けて、「読む力」の育成を図る。

事前の指導計画（展開部）

中心教材『お手紙』のお気に入りの場面を「お話ハウス」で紹介する言語活動を、各単位時間の終末で、並行読書教材のローベルの友だちシリーズで繰り返す**「入れ子式」**を設定した。

単元の展開部の指導計画（１単位時間の流れ）	
（前半）中心教材を使った学習	（後半）並行読書教材を使った学習
第２時　あらすじを書く	第２～５時 各時間の前半と同じ言語活動を、並行読書教材で繰り返す
第３時　人物の気持ちを想像して吹き出しにせりふを書く	
第４時　場面を選んだ理由を書く	
第５時　友達と感想を交流し、心に残った感想を書く	

【改善点】

- 解釈を深めるための共通の話題を設定する
- 中心教材と並行読書教材を扱う時間を十分取り、習得と活用をじっくり繰り返す
- リーフレットの作成過程と学習過程をリンクさせる

改善後の指導計画（展開部）

中心教材『お手紙』とローベルの友だちシリーズの並行読書で、それぞれに「親友を感じる大好きな場面」を選んでリーフレットに紹介する言語活動を１単位時間ごとに行う**「ＡＢワンセット方式」**に変更した。

第２時 中心教材で選んだ場面のあらすじを書く 第４時 中心教材でお気に入りの場面を選んだ理由を書く	第６時 中心教材を読み「二人は○○な友だち」とまとめる 第８時 二つの教材を読んで考えた「親友」についての感想を交流する 第７時 並行読書教材で「二人は○○な友だち」とまとめる	第３時 第２時の言語活動を各並行読書の作品で行う 第５時 第４時の言語活動を並行読書の作品で繰り返す

〈授業における課題〉

単元を貫く言語活動を取り入れても、「お気に入り」や「大好き」を紹介するだけで子どもの解釈が深まらない、並行読書に時間がかかりすぎる、指導過程が場面ごとの読み取りを行っているなどの授業が散見される。

改善

授業改善のためのポイント

○並行読書の教材を用いて活用を図る言語活動の時間を弾力的に設定することや、読みを深めるための「お気に入り」や「大好き」の解釈を深める視点を設定するなど、児童の発達の段階や状況を見極めた単元構成や言語活動の工夫が必要です。

中学校国語　第１学年「登場人物についての意見交流会を開こう」（教材名：「少年の日の思い出」）

〈授業改善の方策〉

教材文を場面ごとに詳細に読んでいく学習から、付けたい力を見極め、生徒が主体的に取り組む学習となるよう、適切な言語活動を単元を貫いて位置付ける。

〈改善前の単元計画〉

○従前の場面ごとの読み取りで、付けたい力が明確になっていない。

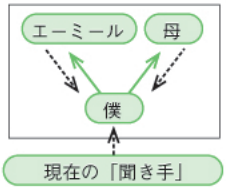
一次	全文を通読し初発の感想を書く		
二次	全体の構成を捉える		
	後半	「客」の行動の意味を考える	場面ごとに読む
		「僕」のちょうへの熱中ぶりを捉える	
		「僕」の「エーミール」への気持ちを捉える	
		⋮	
		最後の場面の「僕」の行動と心情を捉える	
三次	まとめの感想を書く		

〈改善後の単元計画〉

○語り手に着目して作品を読む活動や自分の考えを交流する活動を取り入れるなど、主体的な課題解決の場を設定する。

付けたい力「読むこと」（オ）

語り手に着目することで文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分のものの見方や考え方を広くすること。

一次	作品の設定〈時間的な構成（現在と回想）・場所・視点人物〉、登場人物の人物像と人間関係を理解する。	
二次	**活動①**「僕」の視点から「エーミール」・「母」についての僕の心情を捉える活動①の視点（⟶） **活動②**「エーミール」・「母」・「現在の聞き手」の視点で作品を書き換えたり創作したりして、考えたことを話し合う。 活動②の視点（⇢）	 ※聞き手の文章は創作
三次	活動①、②を通しての自分の考えの変容を振り返り、作品に対する感想や考えを交流する。	

単元を貫く言語活動　登場人物について意見交換会を開く

〈授業における課題〉

言語活動を位置付けてはいても、教師主導で教科書教材を場面ごとに読む従前の授業になっている。また、ねらいと言語活動が整合していなかったり、適切な評価が行われていなかったりする授業が散見される。

改善

授業改善のためのポイント

○単元に課題解決の場面や伝え合う活動を設定して、主体的・協働的に学習し、国語の力が確実に身に付けられるよう単元構成や評価を工夫することが必要です。

小学校算数　第４学年　わり算の筆算（1）～わり算のしかたを考えよう～

〈授業改善の方策〉
探究心を高めるために、児童から「問い」を引き出す問題提示を工夫するとともに、見通しをもたせた上で言語活動の充実が図られるように、発問を「検討」する。

1　子どもの探究心を刺激する問題の工夫

＊全ての子どもが考えをもてる問題を提示する。
＊子どもから「問い」が発せられる問題を工夫する。

【問題】
青色のテープの長さは24mです。青色のテープの長さは、黄色のテープの長さの４倍です。青色のテープの長さは、赤色のテープの長さの６倍です。
一番短いテープは何色のテープですか。

S:「青、黄、赤の順番で短くなるのかな？」
＊子どもとの対話を通して、長さを求める必要感をもたせて探究心を高め、課題を焦点化する。
T:「何色のテープかをどうやって調べたらいいかな？」
S:「黄色と赤色のテープの長さが分かると･･･」

学習課題　黄色のテープの長さを求めるにはどうすればいいのだろうか？

2　課題解決の見通しをもたせる発問の吟味

T：「どうやって考える？」「何を使って考える？」
S１：「図を使って考えようかな」
S２：「□を使った式で求められそうだよ」

3　子どもの状況を見取り、「学び合い」の場をコーディネート

T：「けんたさんは、この後、どのように考えたのかな？」
T：「あき子さんの式から、何算で考えるとよいのかな？」
＊個々の見通しやつまずきを意図的に取り上げながら、方法や理由について考える場を設定する。
＊教師は、図と式を関連付けてまとめをするように促す。
＊学んだことを生かす評価問題（例：赤色のテープの長さを問う）を取り入れる。

〈授業における課題〉
めあての設定が教師主導になり、児童が主体的に学習に取り組めない授業や、どのように「比較・検討」させるかで戸惑い、評価・振り返りまでいかない授業が散見される。

改善

授業改善のためのポイント
子どもが主体的に学ぼうとする態度を育てるために、問題提示から学習課題提示までの子どもとの対話や、見通しをもたせる発問、学び合いをコーディネートする発問をどうするか、シミュレーションすることが重要です。

中学校数学　第１学年　一次方程式

〈授業改善の方策〉
生徒が数学のよさを実感できるように学び合いの過程を工夫する。

【例】「一次方程式」本時のねらい：分数係数の一次方程式を解くことができる。

学　習　活　動

［問題］次の方程式を解きなさい。

$$\frac{1}{3}x - 4 = \frac{1}{5}x$$

［課題］係数が分数の方程式はどのようにして解けばよいか。

ア：分数のまま計算する

$$\frac{1}{3}x - \frac{1}{5}x = 4$$

イ：整数係数にして計算する

$$\frac{1}{3}x \times 15 - 4 \times 15 = \frac{1}{5}x \times 15$$

［まとめ］両辺に分母の最小公倍数をかけて、係数を整数にして解けばよい。

学び合いの構想	ポイント
学び合いで取り上げる考えの絞り込み	事前にどんな考えを取り上げて学び合いをするのか構想しておくことが大切です。
考えを全員に広げる工夫 ・根拠を明らかにしながら、方法や理由等について複数の生徒に説明させる。 ・一部を提示して続きを考えさせる。 ・全員にそれぞれの方法で解かせる。	比較・検討するためには、取り上げた考えを全員が理解しておくことが大切です。
考えを深める工夫 ・どんな既習内容を活用しているのか。 ・整数項にも最小公倍数をかけるのか。 ・どちらの考えが簡単か、正確か。	既習内容との関連から根拠を明らかにするなどして考えを深めるとともに、よさを実感してまとめることができるように比較・検討することが大切です。
まとめを引き出す工夫 ・まとめにつながるキーワードの板書	まとめにつながるキーワードを板書して価値付けることが大切です。

〈授業における課題〉
課題を生徒の言葉で設定したり、生徒の気付きを取り上げながらまとめをしたりする授業が見られる一方で、教師や解決できた生徒の説明だけで進められる授業も散見される。

改善

授業改善のためのポイント
生徒が、まとめの意義やまとめたことのよさをより実感できるものにするために、どんな問いや考えを引き出し、どのように全員に広げ、深め、まとめに導くかを事前に想定して、授業づくりをすることが大切です。

Ⅵ 特色ある校内研修の取組例

1 授業力を向上させる校内研修の工夫

【A小学校】では、研究教科の授業研究会を年３回実施しています。１回目の研究会で明らかになった課題について、全員が次の研究授業までに日常の実践で取り組み、その実践を持ち寄って授業研究会に臨むため、より質の高い協議がなされます。こうした工夫により、３回の授業研究会でＰＤＣＡサイクルがより確実となり成果を上げています。

自校の研究教科の研究テーマの解明

第１回校内授業研究会（６月）

共通実践

課題を全員で共有し、第２回の授業研究会までに改善に取り組む

第２回校内授業研究会（10月）

○授業者は、第１回の研究授業の課題改善を図る授業提示
○授業参観者は、日常実践の報告及び授業の改善点を指摘する

共通実践

課題を全員で共有し、第３回の授業研究会までに改善に取り組む

第３回校内授業研究会（２月）

３回の研究会を通しての課題改善の状況を評価する

【B中学校】では、研究授業の事前検討会を３回設定しています。３回の検討を通して、指導案の内容が高まるだけでなく、一緒に検討している他教科の教師の授業への理解が高まります。これにより、授業研究会では、学校の研究テーマについて教科の壁を超えた協議が可能になります。

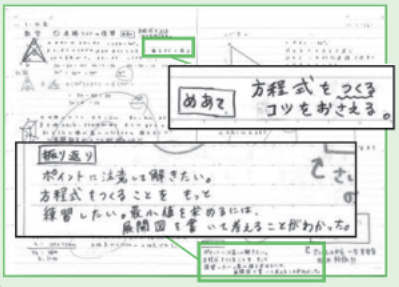
教科の壁を超える工夫①「事前検討会」の充実

第１回 事前検討会 → 第２回 事前検討会 → 第３回 事前検討会

①１回の研究会では２～３教科を実施する。２教科の場合は、１グループ４、５人で検討する。
②対象教科の指導要領を持ち寄り、教科のねらいや指導内容までを確認する。
③全員がそろわなくても検討会を必ず３回実施する。

教科の壁を超える工夫②「自主勉強ノート」の工夫

家庭学習ノートの記入の仕方を工夫し、めあてと振り返りを書くようにしている。授業と同じ展開で学習させることにより、常に見通し・学習活動・振り返りを意識した取組が自主的に行えるようにしている。

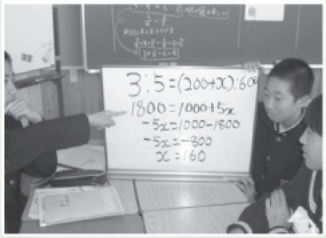


教科の壁を越える工夫③「言語活動」の共通実践

自校で設定した６つの言語活動から教科部でそれぞれ２つを選択し、年間を通して実践研究を行う。教科の壁を越える研修として言語活動の研究を効果的に研修に組み込んでいる。

言語活動	国語	社会 数学 理科	音楽 美術	保体	技術 家庭	英語
感受・表現			○			
記録・伝達	○			○		○
解釈・説明		○				
評価・論述	○					○
構想・実践			○	○	○	
討論・協同		○			○	

付箋紙を使った話合い（３年国語）



ホワイトボードを使った説明（２年数学）

2 教師の指導力を高める教室環境づくり

教科教室制の効果

【C中学校】では、国語、数学、社会、英語を学習するための「教科教室」を設置しています。

①通常のホームルームの学級には掲示できない教科のスローガンや、学習に関する掲示物を掲示することができます。
②掲示物の効果について、教科担当者と管理職で掲示の効果について面談を行い、常に改善を図っています。これにより、教師の指導力の向上も図られています。
③教科教室を各学年棟に配置し、移動時間を少なくする工夫もしています。

【生徒への効果】

①主体的な学びへの動機付け
教室環境が変わることにより、次の授業に取り組む意欲が高められます。

②規範意識の醸成
教室を移動することにより忘れ物がないか確認する習慣が身に付きます。また、次に教室を使う人のことを考えた使い方が出来るようになります。

生徒による英文の詩の掲示

教科（写真は数学）のスローガンを教室の前面に掲示して教師の思い伝えています。

校内百人一首大会に向けた掲示物が大会を盛り上げます。

3 授業力と学級力の双方で学力向上を目指す取組

【D小学校】では「見通し→発表→話合い→振り返り」というあきた型の授業スタイルを、自校の児童の実態に合わせて、「わかる・できる」授業づくりを目指して、国語科を研究教科に据えて、授業のユニバーサルデザイン化を図っています。また、児童自らが学級の状況を評価し改善する学級力向上プロジェクトに取り組み、組織的に学級の力を高める工夫をしています。

(1) ユニバーサルデザイン授業の展開

「ないと困る」支援であり、どの子にも「あると便利」な指導方法

授業の「焦点化」

- ①明確な「ねらい」「授業内容」
  - ・何を学ぶのか、分かりやすく提示する
- ②分かりやすい「発問」「指示」
  - ・何をするのか、何のためにするのか
  - ・ねらいを達成するための発問の精選

授業の「視覚化」

- ③視覚的な「板書」
- ④課題解決の手がかりの提示
  - ・子どもの特性を考え、授業の流れや手がかりを提示する

授業の「共有化」

- ⑤意図的な「机間支援」
  - ・一人一人と触れ合うチャンスを生かし、学習意欲を高める
- ⑥共有・深化のための「活動」
  - ・ペア・グループ等を取り入れて、全ての子どもが学習に参加する機会を与える
- ⑦肯定的な「評価」
  - ・できたことはしっかりほめ、短く具体的に評価する

D校のユニバーサルデザインの7つの視点

実態把握・教材分析・単元構想

課題と出合う（見通しをもつ）
【必要感をもち、解決方法を考える】

第１発問
（学習の土台に上げる）

自分の考えを表現する
【言葉・文章・絵・図など】

言語に変換

自分の考えを伝える
【言語表現の技術・話型】

第２発問
（ねらいに迫るため）

自分の考えを深める
【比較・分類・関係・整理・条件】

学習をまとめる
【課題に直結したまとめ方】

(2) アンケートを生かして学級の力を向上させる取組

学級力アンケートの実施

・「目標達成力」、「創的対話力」、「協調維持力」「規律遵守力」の４観点、８つの項目から自己評価を行い、レーダーチャートに表す。

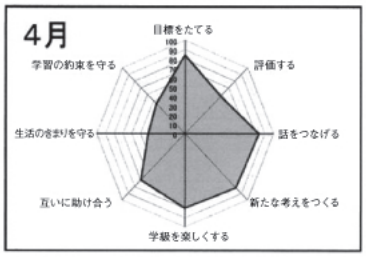
実態把握と取組の計画

・レーダーチャートを大きな紙に印刷して、その用紙に学級の実態や今後の取組を書き込んでいく。

ＰＤＣＡサイクルでの取組

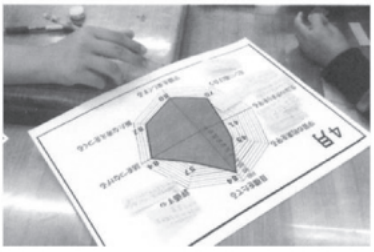
・アンケートの実施→計画→実践→振り返り→実践というＰＤＣＡサイクルで１年間取り組む。

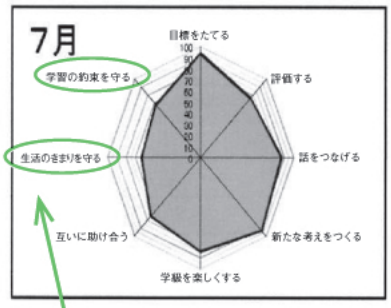
＜アンケート打ち込みシート＞



※新潟大学教育学部附属新潟小学校の実践を参考に作成

改善点を付箋紙を使って話し合う





チャートの結果と実際の生活の様子を比べながら、伸び悩んでいる項目について更に改善を図る。

Ⅶ 検証改善委員による提言

検証改善委員会委員長
秋田大学教育文化学部教授　阿部　　昇

1．秋田県の教育の先進性とその発展

秋田県が全国学力・学習状況調査で７年連続で全国トップクラスの成績を達成している理由の第一は、何と言っても先生方の授業力の高さにあります。「①めあて・ねらい（課題）の設定」→「②一人一人⇔グループ⇔学級全体による探究」→「③探究の振り返り」といった**秋田型授業スタイル**が、多くの学校、多くの先生方によって実践されています。その背景には、丁寧な教材研究とそれに基づく単元・授業の目標・ねらいの絞り込み、緻密な授業プラン、高い授業技術などがあります。

そして、それらは、**秋田型の共同研究システム**による授業研究の質の高さによって大きく支えられています。研究授業の際のチームによる事前研究→付箋紙やグループ検討を生かしたワークショップ型授業検討会→ビデオ等を生かした事後研究などが一つの典型です。校内研修、小中連携研修、小小連携研修、中中連携研修など、多様な形式の研修体制も効果を上げています。

学級経営、学年経営、学校経営の質の高さ、学校・家庭・地域の連携の強さなども重要な点です。また、県教委・市町村教委・各学校の管理職・先生方というタテの繋がりの良さ、市町村校長会・教頭会・研究主任会などのヨコの繋がりの良さも大切な役割を果たしています。

2．地域による授業の質の格差、授業研究の質の格差の解消を

一方で、秋田県内でも地域や学校間において授業の質に格差があります。目標・ねらいが抽象的で曖昧なまま活動や追究が展開されている授業、教材研究が十分深められないままに進められている授業、ワークシート依存の授業、一部の子どもと教師だけで展開されている授業、揺さぶりが甘く子どもの思考を十分に深めさせていない授業なども一部に存在します。

そういう授業の背景には、授業研究体制の形骸化があります。地域や学校による研究格差です。研究授業で形式的打合せはあるが実質的に授業者が孤軍奮闘しているケース、授業後はほめ合うだけで課題や改善点が見えないケース、研究授業が日常的な共同研究に繋がらないケースなどです。

そういうケースでは、チームによる事前研究が機能していない場合が多いようです。先生方の同僚性も弱い。研究主任・研究部がリードしてチームによる事前研究を実質化させる必要があります。

もう一つ、それを乗り超える鍵となるのが**「壁を超える」**です。中学校は教科担任制のため、全校的な共同研究を進めにくい傾向があります。「専門外だから」と言って共同研究を拒否するのです。確かに教科の専門性は重要です。しかし、あえて教科の壁を超えることで専門性は磨かれます。教科の壁を超えた先生方によるチームを結成し事前研究から共同で検討を行うことを試みてください。

学校質問紙で「教育目標やその達成に向けた方策について全教職員の間で共有し、取組に当たっていますか」に対し「よくしている」と回答した秋田県の中学校は、そうでない中学校に比べよりよい成果を上げています。それ以外の「全教職員の間で共有」を含む質問紙にも、教科の成果と高い相関があります。教科の壁を超えられない中学校は、これらに肯定的な回答をしていないはずです。

教科の壁を超える際に、有効な方法の一つが「小中連携」です。校種の壁を超えること自体に意義がありますが、同時に小中連携の中で教科の壁がより超えやすくなります。この場合、事前研究から教科を超えて小中の先生方がチームを作るのです。

そういった際に、指導主事、教育専門監、大学教員など**「外部助言者」**を招くことも効果的です。

3．30人学級の全学年への拡充と、学校間格差の改善、多忙化の解消―教育委員会への提言

秋田県は、全国に先駆けて「30人程度学級」を広げてきました。すばらしいことと思います。ただし、残念ながら全学年には広がっていません。早急に全学年に広げていただきたい。

地域・学校間にある学力格差のために、先生の「加配」をお願いします。また、改善が必要な地域・学校には、上記で述べた助言者を重点的に継続的に派遣し、校内研究の改善、小中連携研究の実施、さまざまな授業改善の具体的方策などについて手厚い支援をお願いします。

先生方の「多忙化」解消にも取り組んでください。先生方が質の高い授業を行うためには時間の保障が必要です。実務の肥大化への対策、中学校の部活動指導の負担軽減などは必須です。部活動指導の外部委託の取組は全国で始まりつつあります。できるところから是非取り組んでいただきたい。

検証改善委員会委員　文部科学省初等中等教育局教育課程課　教科調査官　水谷　尚人

1．見通しを立てることについて

授業において皆が主体的に学習に取り組むためには、単にめあてやゴールを提示するだけに留まらず、やるべきことをしっかりと共有し、取り組む内容への意欲を高める必要があります。授業を構成する際には、考えてみたくなるような題材の工夫や提示の工夫について検討していただきたいと思います。また、取り組む内容が自分自身の（切実な）問題となるように工夫することも大切です。多くの児童生徒の考え（予想）を聞くことも自分自身の問題として捉えさせるために効果的でしょう。重複も誤答も許し、なるべく多くの児童生徒に発言を求めるなどの工夫も必要でしょう。さらに、めあてを児童生徒から引き出すような工夫ができればすばらしいですね。これらの工夫は、班活動が有効になされるためにも必要なものだと考えます。

2．振り返ることについて

全国学力・学習状況調査の結果を見てみますと、「読み取り、解釈して解答すること」や、「前提と結論をあわせて記述すること」、「根拠を記述すること」などに成果が現れています。ここに秋田県の普段の授業のよい特徴が現れています。一方、おそらく本人はよく分かっているのに誤答になっているケースもあり、ちょっとしたつまずきへの対応には課題があるようです。本時の学習内容を振り返ることはもちろん、自分で表現したものが求められているものかどうかを思慮深く見直すことも狭い意味での振り返りとなるでしょう。「話す・書く」など表現する機会を増やし、表現したものについて振り返り、思慮深く考えていくことも大切にしたいものです。

本県の小・中学校のよさを生かし、更に充実発展させるために

検証改善委員会では、全国学力・学習状況調査のデータを基に、「安定した成果を示している学校」、「課題の改善状況が顕著である学校」がもつ特長から、学力向上を支える関連因子を見付け、それらを「一人一人の学力を伸ばすあきたの学校～５つのエッセンス～」としてまとめてきました。本誌では、このエッセンスに関する質問紙の結果を再分析し、改めてエッセンスの有効性を確認することができました。各学校において、この「５つのエッセンス」を、児童生徒の一層の学力向上に活用していただければ幸いです。

一人一人の学力を伸ばすあきたの学校
～ ５つのエッセンス ～

1　学校体制でＰＤＣＡサイクルの確立

毎年、効果のある取組を進めている学校では、教科や学年・校種を超えた、教員の共同研究が推進されています。質問紙では、「全国調査等の問題及び結果等を全校体制で活用する」「教育目標やその達成に向けた方策について共通理解し、取り組んでいる」などが全国の結果を大きく上回っており、本県が提唱する全国学力・学習状況調査、県学習状況調査、高校入試を一体と捉えた検証改善システムの充実が進んでいます。

2　子どもたちが安心して学習できる環境づくり

児童生徒質問紙では「先生は自分のよいところを認めてくれている」「自分にはよいところがある」「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦する」などが全国の結果を大きく上回っています。これは子どもたちが前向きで真摯な姿勢であることはもちろんですが、児童生徒のよさや可能性を積極的に評価して、自己有用感をもたせようと工夫を凝らしている本県の教師・学校のきめ細かく温かい学習環境づくりが生み出した結果です。

3　子どもたちの思考を促し深める授業づくり

本県では、子どもたちが自ら考えることを大切にする授業が多く行われています。また、学習課題についてグループで話し合わせたり、学級全体で意見交換させたりする探究型授業が盛んです。昨年度に引き続き、質問紙では「授業のはじめに目標（めあて・ねらい）が示されている」「授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っている」などが高い数値を示しています。今後は、思考を広げ、深める話合い活動の充実が必要であることが、今年度の調査結果から明らかになっています。

4　自発的学習を生み出すきめ細かな指導

子どもたちに確実に学力を身に付けさせるためには、教師待ちでない自発的な学習を促す指導の工夫が大切です。児童生徒質問紙でも、「自分で計画を立てて学習する」「家で苦手な教科の勉強をする」などが全国の結果を大きく上回っています。今後更なる学力向上を期して、家庭学習充実のための指導、補充学習の取組、自ら「問い」をもつことができる子どもの育成等の充実に向け、学校体制として継続的に取り組むことが求められています。

5　豊かな教育力を生む学校・家庭・地域の強い連携

家庭と地域が、強く学校を支持してくれていることが、本県教育の強みです。子どもたちの授業に臨む姿勢、家庭学習の充実なども、それと関わりがあります。本県では、学校から家庭や地域への働き掛けや呼び掛けも丁寧にされています。それが、学校・家庭・地域の豊かな連携を生み出します。

平成26年度秋田県検証改善委員会委員一覧（敬称略）

阿部　　昇（秋田大学教育文化学部教授）
水谷　尚人（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）
廣野　宏正（義務教育課長）
長岐　祐輔（総合教育センター副所長）
野村　重公（能代市教育委員会学校教育課長）
奥　　瑞生（秋田市教育委員会教育次長）
大山　　裕（秋田市教育研究所主席主査）
加賀　　徹（湯沢市教育委員会学校教育課長）
浦山英一郎（仙北市教育委員会参事）
藤澤　　昌（仙北市立角館中学校長）
鷲谷　真一（義務教育課副主幹）
太田　博史（義務教育課副主幹）
工藤　真弘（義務教育課主任指導主事）
赤川　　太（義務教育課主任指導主事）
山脇　　聡（総合教育センター主任指導主事）
佐々木泰宏（総合教育センター指導主事）
山口　　誉（北教育事務所指導主事）
京野　真樹（中央教育事務所指導主事）
畑　　朋幸（南教育事務所指導主事）
加藤　勝則（南教育事務所仙北出張所指導主事）
山田　仁美（義務教育課指導主事）
椎名美穂子（義務教育課指導主事）
櫻庭　直美（義務教育課指導主事）
中山大一郎（義務教育課指導主事）
中井　　淳（義務教育課指導主事）